

清代士大夫の尺牘に見る劉熙載の人物と書論「書氣」の考察（その一）

—— 萬斛泉書簡釋讀を中心として ——

鐵崖相川政行

△そのⅠ▽ 應敏齋に復する尺牘

復應廉訪

五月二十三日奉讀手示殷注雅懷溢於言表鄙儒自揣所學本不足以問世閣下以深愛之故雖政務叢集兩千里外屢降德音足徵待人之厚而與人之壹劉春坊者去秋吳孝廉向稱其品學極端閣下今既延之足慰栽培多士素心即泉亦憾嬾嬾在疚不獲即附弟子之列以受教益也來教降服祥除當可出門云云泉近查

【釋文】

復應廉坊

五月二十三日。奉讀手示。殷注雅懷。溢於言表。鄙儒自揣。所學本不足以問世。閣下以深愛之故。雖政務叢集。兩千里外屢降德音。足徵待人之厚。而與人之壹。劉春坊者去秋吳孝廉向稱其品學極端。閣下今既延之。足慰栽培多士。素心即泉亦憾嬾嬾在疚不獲。即附弟子之列以受教益也。（以下略）

f ù yì lián fǎng
wǔ yuè èr shí sān rì fèng dū shǒu shì yīn zhù
yǎ huái yì yú yán biǎo bǐ rú zì chuāi sǒu xué
běn bù zú yì wèn gé xià yì shēn ài zhī gù suī
zhèng wù cóng jí liǎn qiān lǐ wài lǚ jiàng dé yīn
zhú zhēng dai rén zhī hòu ér yǔ rén zhī yì lú
chūn fāng zhě qū qiū wú xiào lián xiàng
chēng qí pīn xué jí duān gé xià jīn jì yán zhī
zhú wèi zāi péi duō shì shù xīn jì quán yì hàn
huān huān zài jiū bú huò jì fù dì zì zhī liè yì
shòu jiào yì yě lái xiáng fú xiáng chū dāng kě
chū mén yún yún quán jìn chā

【訓読】

五月二十三日、手示を奉讀せり。殷おほいに雅懷がかいを注ぎ、言表に溢る。鄙儒ひじゆ自から揣はかるに、學ぶ所の本以て世に問ふにたらず。閣下以て深く之を愛するが故に、政務叢集と雖ども兩千里外より、屢しばしばば德音を降くだせり。人を待するに厚くして、人と與くみするに壹いつなるは徴すに足るなり。劉春坊は去秋吳孝廉に向まきに其の品學の極めて端たんなるを稱せらる。閣下、今既に之を延ひけり。多士を栽培するを慰むるに足る。素心即ち泉も亦た憾うらまむ。嫖嫖けんけんとして疚いたみに在りて獲えざらむ。即ち弟子の列に附して以て教益を受けんかな……(以下略)

【現代語訳】

五月二十三日、閣下からの玉翰拝讀しました。みやびな懐おもいがおほいに注がれ、言外に溢れておりました。このいなか儒者である小生が自から己の學問を推しはかってみますと、その本質が足らずしてただ世に問うばかりのものであります。應閣下はこんないなか儒者をふかく愛しおおもい下さるが故に、政務が御多忙であると

言えども二千里外の遠いところからでも、しばしば善言をおよせ下さいまして感謝にたえません。これは人を待するに極めて厚く、人と交わるに誰れに対しても等しくすることで、誠にとどめるに足るものでありましょう。

さて、昨年の秋に呉孝廉が以前に、劉熙載左春坊は品位學問が極めて最高な域に達していることを稱されていた。應閣下は今もう既に彼を書院の院長として招請されております。院でのこれからの若者を訓育するのはまことに慰するに足るものであります。素直に申せばこの斛泉の心も亦うらやましい限りであります。今は病にあって、ひとりたよるところなく、その空虚でとらえどころなくおる始末であります。小生 泉も劉氏の弟子に加わって、教益を受けたい思いでいっぱいあります。

【語 釈】

○復應廉坊 復は手紙で返事をする。回答する。應寶時（一八二〇？）のこと。字は心易、可帆。號を敏齋といた。浙江永康の人。廉坊は役名。敏齋は劉熙載にとつては第二の人生を切り開く大恩人と言うことになろうか。

熙載が廣東學政を致仕後についた、上海龍門書院の言わば創建者と言うことで、この書院の主講（院長）に招聘した人物である。科舉應試の結果は舉人で、熙載の科舉殿試の及第者（進士）とは格段に差があるのであるが、

なぜか書院經營者のな有力者であったとみえ、既に清末も政治的疲弊があり、洪秀全（一八一四～一八六四）の南方を中心にして北方に廣がっていく革命的亂もあった。一般民衆の生活苦からくる道德の頹廢から何とか民衆を救おうとする教育の重要性からか、これら書院の充實や時の孔子廟の復興等に力を注ぎ釋奠、即ち聖人・孔子を祭る儀式の勵行等に努めている。その効力は別としても、官は江蘇按察使に至り、監察の職にあつて治安に務める人物でもあった。その伝は『兩浙猷軒續録』にも詳しく、水難等に苦しむ人民大衆をよく救済している。それでいて、著に『射雕詞』（又は『射雕館集』）射雕館は應の室名もあつて、清末、滬（上海）方面の文人として名をもとどめている。萬斛泉も劉熙載も應敏齋に多くの書翰を書き残している。

○奉讀手示 手示は直接書いた書翰、特に目上の人の

手紙。應敏齋が書いたもの。奉讀はそれを恭しく読んだこと。○殷注雅懷||殷はおおい。又は穩やかでねんごろ。雅懷は手翰中の相手方のみやびな懐い。ここでは應敏齋の懐い。○鄙儒自揣||鄙はいやしい。儒者、萬斛泉自ら謙遜した語。わたくし。一人稱の謙稱に、鄙人がある。萬斛泉の號は清軒、湖北興國州の人。同治五年から一年間龍門書院の主講を務めた。劉熙載の前任者である。揣音はヘシ、はかる、思考する。自から付度すること。後に自からは泉一字で自称している。○閣下||高位高官にある人への敬稱。ここでは應敏齋を言う。○足慰||安ずるに足る。○政務叢集||政務は官職上の任務、仕事。叢集はむらがる。多忙なること。○德音||よきことば。善言。應敏齋が尺牘中に語られた導きのお声。『詩經、邶風・谷風』には「善言莫違、及爾同死」とある。後、転じて他人の言辭に対しての敬稱となる。御返事。○足徵待人之厚而與人之壹||足徵は先の足慰と同じように足を用いての単語であろう。徵は一般には徵集、徵兵等の意をもつが、ここでは證する、あかすの

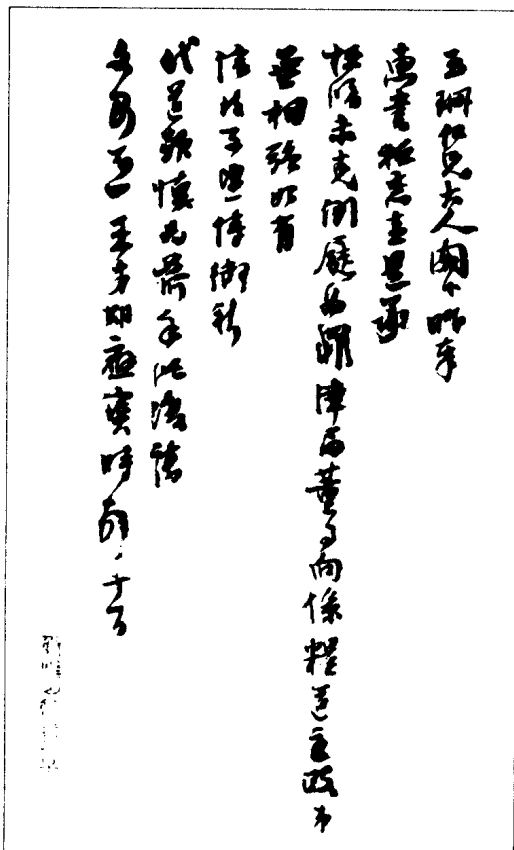
意、更には明らかにする。現代中国語では証字に通ずる。人を迎え受けるに厚くし、人と交わるに上下なく平等に接する。○劉春坊者||劉は熙載のこと、春坊は左春坊で、または左中允とも言う。熙載の官名、皇太子等の教育に当る職、侍講。左右は清朝では滿人、漢人のそれぞれを左右に当てたことを意味する。六十歳頃廣東學政に意に反してほぼ左遷的に放任されたようで、その後表面上は身体不調を理由に致仕した。その時、應敏齋のはからいで、上海龍門書院の主講（山長）になる。その院長につくに当たっての前後がこの書翰から推察できる。○去秋吳孝廉向稱其品學極端||去秋は昨年の秋、吳は人名未詳。孝廉は漢代の徵士の名稱であるが、清代等では舉人を指す。向は嚮、さきにと訓ずる。稱は稱賛すること。其は劉春坊を指す。品は品行、學は學識、學問。極端は今日の日本語では中心をはずれることであるが、はしのはし、はてのはてで學問・學識が極めて高いレベルに在ること。○延之||延はひく。引き入ること。書院の長に引き推舉招聘した。○栽培多士||栽培は植えつけて

培うこと。植えつけ育てること。今日、日本では野菜や植木に言うが、ここでは多士が示すごとく多くの若いこれからの諸生や、士人を志すものを養成する意。○素心即泉亦憾嫖嫖在疚不獲〓素心は素志、日ごろのこころざし、萬斛泉の心を言う。憾はうらやむ、うらめしい。嫖音はヘケン。ひとりのさま。たよるところのないさま。『詩經、周頌、閔予小字』に「遭家不造、嫖嫖在疚」とある。疚に在ることが、くりかえされる。在疚の疚はやむ、心をやむ。不獲は何もえない。空虚な存在であること。○附弟子之列〓萬斛泉が龍門書院の諸生達と一緒にになって、劉熙載の弟子の中に加わって教えを受けたの意。

◆應寶時著『射雕詞』（北京社会科学院蔵）



◆應敏齋尺牘（内容は本論に無関であるが手迹に注意したい）



△そのⅡ▽ 躍齋への手簡

【釋文】

躍齋足下來到蘇未久酬應頗多兼以頭痛眼花未獲致書探問

足下乃不忘舊好

垂注彌殷不勝抃欣

庸齋山長品高識定即其簡放廣東學政至任事違素志力行辭退一

節有壁立千仞氣象當此士習波靡人心潰決之際值此義利分明

視軒冕如泥塗等富貴若浮雲者我輩正當奉為山斗斷不可以

第一等事讓入自作第二等事矣

足下既居院肆業自當確守院章何有曠廢時日跋涉數百里以遂故

躍齋足下。泉到蘇未久。酬應頗多。兼以頭痛眼花。未獲致書探問。

足下乃不忘舊好。

垂注彌殷。不勝抃欣。

庸齋山長。品高識定。即其簡放廣東學政至任事違素志。力行辭退。一

節有壁立千仞氣象。當此士習波靡人心潰決之際。值此義利分明。

視軒冕如泥塗等。富貴若浮雲者。我輩正當奉為山斗。斷不可以

第一等事。讓入自作第二等事矣。

足下既居院。肆業自當確守院章。何有曠廢時日。跋涉數百里。以遂故

舊之情秋後 方伯若肯放 泉還家或假道滬上以僦輪船則後會當

有期日也肅此佈復順詢

近佳萬斛泉拜手 初九日

舊之情。秋後。方伯若肯放。泉還家或假道滬上。以僦輪船。則後會當

有期日也。肅此佈復。順詢

近佳。萬斛泉拜手初九日

【拼音読】

yùe zhāi zú xià quán dào sū wèi jiù chóu yìng dō duō jiān yì tóu tóng yǎn huā wèi huò zhì shū tàn wèn

zú xià nǎi bú wàng jiù hǎo

chuí zhù mí yīn bú shèng biàn xīn

yōng zhāi shān cháng pīn gāo shí dīng jì qí jiǎn fàng guāng dōng xué zhèng zhì rén shì wéi sù zhì lì xíng cí tuì yī

jié yōu bì lì qiān rěn qì xiàng dāng cǐ shì xí hō mí rén xīn kuì jué zhī jì zhí cǐ yì lì fēn míng

shì xuān miǎn rú ní tú dēng fù guì ruò fú yún zhé wó bèi zhèng dāng fēng wéi shān dōu duàn bù kē (quān xún tuī wéi) yī

dì yī dēng shì ràng rén zì zuò dì èr dēng shì yī

zú xià jì jū yuàn yì yè zì dāng què shǒu yuàn zhāng hé yōu kuàng fèi shí rì bá shè shù bài lǐ yī suí gù

jiù zhī qíng qiū hòu fāng bó ruò kēn fàng quán huán jiā huò jiǎ dào hú shàng yì jiù lún chuán zé hòu huì dāng

yōu qī rì yě sù cí bù fù shùn xún

jìn jiā wàn hú quán bài shǒu chū jiù rì

【訓 読】

躍齋足下、泉蘇に到り未だ久しからず。酬應頗る多く、兼ねるに頭痛、眼花を以てす。未だ書を致し探問するを獲ず。足下乃ち舊好を忘れず。

垂注彌殷、抹欣に勝えず。

庸齋山長は品高く、識定まれり、即ち其の廣東學政に簡放され、任に至るも事は素志に違ふ。力行辭退。一節には壁立千仞の氣象有り。當此れ士習は波靡にして、人心の潰決の際に、此の義利分明に値ふ。軒冕の泥塗に等しきが如く、富貴の浮雲の者の若くに視され。我輩正に山斗と爲すに當り、斷じて逡巡すべからずして、推諉するに、第一等の事を以て人に讓る。自ら第二等の事と作すべし。足下、既に院に居り、業を肄う。自ら當に院章を確守すべし。何ぞ時日を曠廢し、數百里を跋涉し、以て故舊の情を遂げることあらんや。秋後、方伯の若し放たれ肯ずるれば、泉家に還えり、或いは滬上を假道す。以て輪船に僦ひて後に當に期日有るべきなり。肅此佈復し。順詢近佳。萬斛泉拜手す。初九日。

【現代語訳】

躍齋の御もとへ：小生泉は蘇州に今着いたばかりです。種々人との對應におわれています。その上、體調も悪く頭痛や老眼でいまだ手紙を書いて、訪ね問うことも出来ずにいます。しかるに貴下は小生との以前からの友情を忘れることなく、何かと多大なご配慮を下さいまして、手を打って喜ぶに堪えません。

庸齋院長は品位が高く、學識が貴く定まっております。(にもかかわらず、中央政府によって) 選り放たれた。地方の重要な教育職である南方の廣東學政の任にいたたのであるが、これは劉氏自身の素直な心と相違するもので、直に退任してしまわれた。その潔さの劉先生の心情はまるで山や崖の千尋に切り立った険しいものに匹敵する厳しさがありません。しかるに當今の士大夫や学者は學識を高めることなく讀書も淺く、その習慣は傾き滅んでしまっています。指導者がそうであるから人の心はすさみ決潰しているこんな際に、そのような義理と利益を明らかに分けられていることは高官の身分にある者はかえっていや

らしい地位や境遇にあるに等しく、富貴にあるものはそれは不安であてにならないものの若くにみなされましよう。我等はそういう中で劉山長をまさに泰山北斗とすべきである。斷じてまごまごして他人に任せてはならない。第一に劉氏の事を考え自分のことは第二に考えるべきだろう。貴下は既に龍門書院にあって學問や芸術のつとめを行っております。また自らも院の學規を確かに守っておりますから、なんで日時をだらだらと無駄に過し、数百里も歩き、以て古き友情を交わすことがありましよう。それより、今秋後に（敏齋）方伯がもし小生をあえて書院主講を解任してくださったならば、小生泉は家に還ります。あるいはその時に上海迄輪船に乗っていけば、その時まさに會える期日があるろう。その時まで待たれよう。

先ずはつつしみて右お知らせします。ついで近佳を願う。
萬斛泉挥手す。初九日

【語釋】

○躍齋足下〓人名、不詳。この書翰の文面から、恐ら

く萬斛泉と共に龍門書院の指導的立場にあった者であろう。足下は同輩の敬稱、よく書翰に用いられる。○泉〓萬斛泉（二八〇八一—九〇四）、字は清軒、興國の人。咸豐七年（一八五八）、胡文忠林翼によって、「隱逸」より疏擧され、國子監學正となる。『碑傳集補』三十八に傳がある。龍門書院第二代山長、在任期間は一年。この間土習を一變した。この書翰は斛泉と劉庸齋との主講交替に関わる、その實状を示す貴重なもの。著に「尉山堂稿」がある。○蘇〓現在の蘇州市。○酬應〓酬は報いること。報謝、交際上の應對。○眼花〓眼がかすむこと。

○垂注彌殷〓垂は上から下へ、注はそそぐであるが、垂注は垂照とともに旧書翰の用語であろう。御配慮とか助けの手をのべてくれるの意。彌はあまねくいっばいに、殷は大いに。即ち御厚情を多くいただく。四字で起居語に相当する。○不勝抃欣〓抃音はへん・ベン、たくと訓ず。両手で相うちて音を出す。欣はよろこぶ。手をたたいてよろこぶ。不勝はたえず。王羲之の尺牘等にもよく見る。○庸齋山長〓劉熙載の別号か、庸齋は

同時代楊見山（二八一—一八九六）の号が庸齋であるが、楊見山は劉氏との交流はあるが、廣東學政等の職にない。同治重刊本の『上海縣志』龍門書院歷代主講欄に顧方溪、萬斛泉、劉庸齋、吳大徵とある。このことから庸齋は融齋（熙載の號）の誤りとも思われる。庸と融は韻が似るところから、方言的に泉が融齋を庸齋と誤ったか。又は庸齋は龍門書院時代の別號であろうか。廣東學政の任に劉熙載は簡放され、程なく其れを退任しているから、この書簡中の以下内容は劉熙載のことに違いないことは明らかである。○簡放⇨貶放・貶は降職である。又は簡拔・簡択・簡放で、選びはなれたる意もあるが、やはり學政とは言え、中央政朝よりはるか遠方の地で、言わば降格的就任と言えよう。○廣東學政⇨廣東は現在の廣東省。清代の行政区割、學政は教育を司る地方職。清王朝に仕える左春坊中充（皇太子教育職侍講）で中央政府に直屬していた劉熙載が一地方の學政教育職に降職させられたこと。しかし、こゝでは得難いこの地方の學者、陳澧（二八一—一八八二）との交流を受ける。在任期間は極めて短期間

である。この間の陳氏らとの交流は拙著『游藝約言評釋』に詳しい。○違素志⇨違はたがう。返する。素志は素心、日常の心。平素の熙載の志おもしろい、○力行⇨力行はつとめて努力している行動等を言う。即ち、自分の意志や行動等に反しているのだ。奇しくも熙載の晩年の著作『持志塾言』上卷に〈力行〉なる目録がある。26章の短文から成る。學問や人生、その志の達成に向け、この古典文を引用する等の指針が語られている。○一節有壁立千仞氣象⇨「壁立千仞」は成語『水経』、河水注』に見える。山や崖が切り立って険しい形容。千仞は極めて高い、また非常に深い。氣象は氣風。極めて厳しい氣風。出處進退の致仕のあり方が極めて厳しい氣風にあって。奇しくも隱岐の島の國賀絶壁を見た。その壁の様に切り立って直立する断崖を観察すれば、自分の心の信念等に、こんな大自然のような落差と等しい氣象をよい意味でもつ事は今迄なかった。一生において何度も体験できるものでなかるうが、萬斛泉が劉熙載の退任の心中を形容したよき表現である。○當此⇨當今。清代末期。

○士習波靡 士は讀書人、士大夫、文人は今日の文化人、教養人。習はその習慣。波靡は傾き滅ぶ。「斯文掃地」ということで文人たちの地に墜ちたこと。○人心潰決之際 人の心が崩れる、きれる。潰決の原義は堤防が水のため崩れる。蘇軾の『制科策』に「江河潰決、百川騰溢」とある。その水害の破壊力ではあるが、当時の人心の習慣がいかにも墮落したものか。際はそういうときにはの意。清末の動亂期の教養人や一般人の心がいかに亂れていたか、うまく表現されている。○視軒冕如泥塗 等富貴若浮雲者 視は見なす、比する。「視如敝履」は履き古した靴のように取り扱う。価値のないもののように捨てる。軒は身分の高い大夫の乗車と、冕は大夫以上の者のかぶる冠。転じて貴き地位、高位高官。泥塗は①泥、ぬかるみ。②卑しき境遇。恥ずかしき地位。③価値なきもの。ここは②であろう。浮雲は①確かならざるもの。②危なきこと。こゝは① 富貴は富み且つ貴きこと。財産があり身分高きこと。○爲山斗 泰山北斗 泰山は中国を代表する山の雄、その道

の権威者。○斷不可逡巡推諉第一等事 不可は不良と解し、よくない意。逡巡はぐずぐずする。推諉の諉は託、自分の事を他人に押しつけて責任を逃れる、義務を他に嫁する意。全体にそれを第一番に考えるのはよくないことだ。○讓人自作第二等事 人に譲り、自らのことは第二番に考えることだ。萬斛泉が龍門書院主講を劉熙載に託するにたった態度。則ち劉熙載を第一に、自分の事を第二に考えている。○肄業 肄の音はヘイ、①習う、肄習は練習すること。②つかる（勞）。③ひこばえ。こゝは① ○院章 書院に掲げられる書院規（又は學規）、院長（山長）の教育方針により變更されることがある。光緒刊同治重刊本『上海縣志』によれば、萬清軒先生以前の顧訪溪主講の方針が踏襲されていた。○曠廢 ①虚しくなりはてること。②疎かにして捨ておくこと。こゝは②でよい。○遂 ①とぐ、成し遂げる。○故舊情 昔よりのなじみ、古なじみの心情。○方伯 古代においては一地方の諸侯をいった。後世では地方長官の称、明清時代では布政使をいった。「謹案、布政使、稱曰藩

司、亦稱方伯」と『歴代職官表―司道・三代』にある。方伯の上に空格として一字をあけ敬意を稱しているので書院創建者の應敏齋方伯と考えられる。俞樾（二八二―一九〇六）の書翰にも「應敏齋方伯」とあり、泉のこの本文中の内容からも相違ないであろう。○若肯放〓若はもし、肯はがへんず、放ははなつ、書院の主講の任を解くこと。萬斛泉は同治五年に主講に迎えられるが、一年で退任を希望し辭めている。應敏齋が主講の任命権を持つようであった。○滬上〓上海の別称。海申とも言う。又、吳松江の下流即ち黄浦江を言うが、こゝは上海。○肅此佈復〓尺牘用語で、つつしんでお返事申し上げます。○拜手〓頓首の語と同じ。人を拜して手のあたりまで頭を下げる禮。『公羊傳―宣公六年注』に「頭至地曰稽首、頭至平曰拜手」とある。